

「身近でできる子育て支援「陽だまりサロン」の活動を通して」

若松 亜紀(陽だまりサロン代表)

こんにちは。若松亜紀と申します。私からは「身近でできる子育て支援」と題して、活動をご紹介します。



「自宅」を開放しています。住宅街にある普通の家です。



看板と看板息子、オープン当時4歳です。



普通の家なので、庭もあります。



中には小さなお子さんを連れてお母さんが集まっています。お母さんたちはある日、こんなことを言っていました。

「こんなに笑ったの、いつぶりだろう」

「久しぶりにしゃべったから、うまく口が回らない」。

そんなことを聞くにつけ、お母さんって一人で子育てをがんばっているんだなと思います。



来るのは幼稚園に入る前の0～3歳がほとんど。



何をするのかというと。ご飯を食べたり



パンを食べたり、お昼寝したり。家ですのと同じことをしています。



春はデッキからお花見



夏はプールで水遊び



秋はまだまだ水遊び



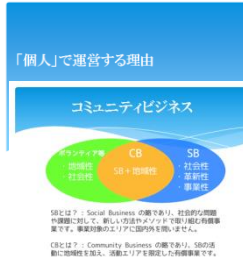
冬は雪で雪だるまを作ったり。

「陽だまりサロン」の活動

春～秋 毎週 水曜・木曜 10時～14時オープン

冬期間 予約制

利用料金 親子一組300円 フリードリンク付き



・NPOや団体ではなく、全くの個人でやっています。

・コミュニティビジネスの形態をとっています。

コミュニティビジネスとは「地域の困りごとを、地域の人がアイデアを出しあって解決していこう」というもので、ボランティアと仕事の中間です。

全くの無償ではなく、儲けを迫及するのでもなく、その中間、いくらかの報酬を得ながらやっていくものです。

私の場合はそれがサロン利用料、親子一組から 300 円いただき、お茶やトイレトペーパーなどを買って回しています。



基本1人でやっておりますが、たくさんの方が関わってくれます。これは、近所の子どもが赤ちゃんをあやしに来てくれた場面です。



転勤族の奥さんが「手伝わせて」と、子どもと遊んでくれます。



得意なことがあるお母さんが、講座を開いてくれます。



建築会社さんが、端材で製作教室を開催してくれました。



これ、いい写真でしょう？老人施設の方が訪ねて来てくれた場面です。

私はこの様子を「いいな～」と微笑ましく眺めていました。

ふと見ると、居合わせた職員さんも全員見ていました。けれどその目が私と違っていました。みなさん「え！？」と驚いて見てい

らっしゃる。

不思議に思って「どうかしましたか？」と尋ねると、一人の職員さんが教えてくれた。「あのおばあちゃんね、うちに来て3か月になるんです。けれど今まで一度も笑ったことがなかったんです。なのに今、あんなにいい顔をされて…。子どもの力って、すごいですね」

私はそれを聞いて胸がいっぱいになり、涙があふれました。

そして改めて思いました。

「子どもに関わる仕事って、なんて素晴らしいんだろう」と。

子育てサロンを開いた理由はふたつ。
ひとつが想像以上に孤独や閉塞感を感じたこと、
もうひとつが、一人で子どもを見ることに限界を感じたことです。



「居場所」をもっと



新しいコミュニケーションの形
「住み開き」



幼稚園の先生をしていたので、いいお母さんになれると思っていました。

けれど、生んでみたら大間違い。
幾度となく繰り返される「授乳→おむつがえ→寝かしつけ」。いつ夜になったのか、いつ朝が来たのか、今日が何日何曜かさえわからない毎日。24時間営業のコンビニを一人で切り盛りするような感覚。

お母さんって、見えないところでこんなに大変な思いをしていたんだ！と痛感しました。
それで「一人で見ているなんて無理！みんなで見合える場がほしい」と、サロンを立ち上げました。

秋田市は子連れで行ける場が増えました。
子ども未来センター、ナンピアなど公共の場もある。

民間でも子育て支援をする団体・個人が出てきました。
県外から越して来た方は一様に言う、「秋田は子育てがしやすい」。
「スーパーで知らないおばちゃんが話しかけてくる」
「子育てクーポンで遠足に行ける」
「子どもを連れて行ける場が多い」がその理由です。

一方で転勤で来た方の中には、車のない人も多いです。そんな方が歩いて行ける範囲に、もっと集える場があれば。

けれど場所を借りたり、建物を建てたりは大変なこと。もっと簡単な方法として、こんなものもあります。

「住み開き」。
新しいコミュニケーションの形として、関東で広がっています。
特徴は。自宅の一部を開放。好きな時に活動。
プライベートはキープ。他者とつながれるといった点です。
この言葉は最近知ったのですが、私がやっているのも「住み開き」です。

「住み開き」の例。左が「2畳大学」、右が「あさやけ子ども食堂」秋田市の例。助産師さんが御野場に開いた「ばーす」。
定期的に妊婦教室などを開いています。
本好きのご夫婦は、居間を「図書室」として週1回オープン。
学校帰りの子どもが、ランドセルをしまったまま借りに来ます。
「住み開き」であれば、すぐにできるのでは？
秋田の若者が外に出て行くということは、それだけ空き部屋があるということでもあります。

「家に知らない人を入れるのは抵抗がある」というのであれば、庭でもいい。軒下に縁台を置くだけでもいい。

知らない土地に来て子どもと二人っきりでいるお母さんにとって、「行くところがある」「自分を迎えてくれる人がいる」というのはどんなに嬉しく、そして心強いことでしょう。

人が集まる場には力があります。活気があります。間違いなく、自分も元気になれます。まして子どもにはパワーがあります。あのおばあちゃんをほほえませたように。

子どもたちの幸せな未来のために



子どもたちの幸せな未来のため、あなたも一歩踏み出しませんか？

「陽だまりサロン」若松亜紀でした。